

# 保育研究における 自己エスノグラフィーの可能性と課題

— 課題を解決する工夫としての日記と TEM の活用 —

濱 名 潔  
(2018年10月4日受理)

Possibility of and Issues Involved in  
Auto-Ethnography Research on Early Childhood Education and Care

Kiyoshi Hamana

**Abstract:** In this study, the possibilities of and issues involved in auto-ethnography research on early childhood education and care are discussed. First, the qualitative research methodology of auto-ethnography as well as its advantages and disadvantages are discussed. The advantages include a description of the facts felt by only the person concerned and expressing the meaning researchers attach to their own subjective and emotional experiences. The disadvantages involve limitations of analytical aspects and using biased data. Second, the possibilities of and issues involved in auto-ethnography research on early childhood education and care are considered. Three possibilities exist: First, to theorize specialist knowledge that ECEC teachers have experienced difficulty phrasing; second, to describe the meaning researchers give to their own ECEC experiences by reviewing those experiences; and third, to have enough persuasive significance to treat researchers' own ECEC experiences as data. On the contrary, a researcher's experiences could not be described as part of the story by attempting to overcome limitations of the analytical aspects. Finally, in order to address auto-ethnography research on early childhood education and care, two solutions are proposed: First, using the researcher's diary to avoid using biased data and second, employing Trajectory Equifinality Modeling (TEM) to describe the researcher's experiences as the story.

Key words: auto-ethnography, ECEC research, qualitative research methodology,  
data from researcher's diary, analysis using TEM

キーワード：自己エスノグラフィー，保育研究，質的研究方法論，日記の活用，TEM の活用

## I. はじめに

### 1. 問題背景

近年、保育の研究分野（以下、保育研究）において、どのように研究を進めていくかという議論がなされており、とりわけ研究方法論が注目されている（e.g., 境ら 2012, 中坪ら 2017）。たとえば2017年の『保育学研究』第55巻第3号では、質的研究の方法論（以下、質

的研究方法論）に関する特集が組まれている（中坪ら 2017）。

質的研究とは、量的研究との対比で位置付けられる概念であり、ある状況の中で人々が捉える現実や、その現実との相互作用の様子を人々の主観性を尊重しながら理解する研究である（中坪ら 2017）。そして、複雑で複合的な保育の営みの中の個別・具体的な現象に対する文脈の影響も踏まえた理解をもたらす可能性が

ある(中坪ら 2017)。しかし、質的研究方法論を用いた保育研究が必ずしも十分な研究成果を生み出しているとは限らない(中坪ら 2017)。たとえば、「都合の良いデータの恣意的引用」「図で絵解きしているが根拠となるデータの欠如」「著者の主観的経験の自己主張」などの「薄い記述」(佐藤 2008)が見られる研究や、明らかにしたい「問題」よりも質的研究方法論の「手続き」「方法」が一人歩きしてしまい保育現実のリアリティが失われている研究などが散見される(中坪ら 2017)。つまり、このような問題は質的研究方法論を不適切に用いることが原因で生じていると予測される。

一方で、質的研究方法論を適切に用いた保育研究であっても、問題は存在すると思われる。榎沢(2018)は、質的研究方法論を用いた保育研究の多くが主観性を排除した科学的客観性をいかに担保するかに意を払っているため、保育の中での人間の体験世界を描くという点では二次的な評価しか得られないという。これは榎沢が、保育研究において、保育実践を生み出す精神を理解するには、保育の世界に身を置き子どもと保育者がそこでいかに生きているかを主観的に理解し、その体験世界を描くことが重要である(榎沢 2018)と捉えているからである<sup>1)</sup>。すなわち、「ある状況の中で人々が捉える現実や、その現実との相互作用の様子を人々の主観性を尊重しながら理解する」(中坪ら 2017)ものである質的研究方法論を適切に用いたとしても、保育の中での人間の体験世界を、分析者が主観的に理解したように描けるとは限らないのである。また、河邊も質的研究方法論を用いた保育研究に限定していないものの、昨今の保育研究について、研究方法や手続きに問題がない当事者性をもった研究であっても、実践者の実感が読み取れない場合があることを指摘している(戸田ら 2017)。

以上の議論を整理すると、保育研究において、質的研究方法論を用いたからといって、保育者の当事者性に基づく実感や体験世界が適当に描けていないことが問題としてあげられる。しかし、質的研究方法論は研究目的との関係で決定される(中坪ら 2017)と言われるように、それには様々な種類の研究方法論が存在する。したがって、このような問題に対して、「質的研究方法論」と一括りに論じることはできないだろう。そこで本研究は、保育者の当事者性に基づく実感や体験世界が描けるような具体的な質的研究方法論を探り、議論することでこの問題にアプローチする。

## 2. 質的研究方法論を用いた保育研究に対する批判の検討

本節では、榎沢(2018)の質的研究方法論を用いた保育研究に対する批判を検討する。そして、この検討を通して、保育者の当事者性に基づく実感や体験世界が描けるような質的研究方法論を探る。

先述した通り、榎沢(2018)は、質的研究方法論を用いた保育研究の多くが主観性を排除した科学的客観性をいかに担保するかに意を払っているため、保育の中での人間の体験世界を描けていないと批判している。これは榎沢(2018)が、津守の研究のように保育実践を自ら体験することを通して保育の当事者の精神を理解し、保育という体験世界を描き出すことができる(津守ら 1976)と考えるからである。確かに、このような考えに基づき、保育者の当事者性に基づく実感や体験世界を描こうとすれば、一部の質的研究方法論は適さないと思われる。たとえば、保育研究で用いられることの多い質的研究方法論の一つであるM-GTA(Modified Grounded Theory Approach: 木下 2007)を例に考える<sup>2)</sup>。M-GTAは、複数の事例から生成した概念を1つのモデルとして構成していくことで種々の事例における人々の経験のプロセスを幅広く説明できる全体構造を明らかにする方法論であるが、事例の数が増えるほどに個々の事例のもつ具体性や時系列が失われると言われている(境ら 2012)。つまり、M-GTAは多くの事例を集積してモデル化し、保育における現象の全体構造を明らかにしようとするが故に、その過程で各事例の具体性や時系列が失われるため、榎沢(2018)が言うような、子どもと保育者がそこでいかに生きているかを主観的に理解して、その体験世界を描くことには適さないと考えられる。

以上より、保育者の当事者性に基づく実感や体験世界が描けるような質的研究方法論には、自らの保育体験を具体性や時系列を大切にしながら描くことが条件として求められる。このような条件を満たす質的研究方法論が自己エスノグラフィー(Auto-Ethnography: Ellis & Bochner, 2000/2006)であり、本研究では着目する。

## 3. 自己エスノグラフィーへの着目

自己エスノグラフィーとは、調査者自身を研究対象とし、自身の主観的な経験について、「私」がどのように、なぜ、何を感じたかという自己再帰的に考察することを通して、文化的・社会的文脈の理解を深める(井本 2013)質的研究方法論である(詳細は第Ⅱ章で後述)。

本研究が自己エスノグラフィーに着目する理由は次

の3つである。第一に、従来のエスノグラフィーが研究者の視点に基づく出来事の表象であるのに対し、自己エスノグラフィーは当事者の視点に基づく出来事の表象である(岡田ら 2008)。したがって、保育を主観性による理解によって実践の中での人間の体験世界を探究する研究(榎沢 2018)に適した質的研究方法論である。

第二に、自己エスノグラフィーは筆者の経験やその時の感情などを振り返り、想起しながらストーリーとして記述していく(沖潮 2013)方法をとるため、自らの保育体験を具体性や時系列を大切にしながら描ける可能性がある。その意味でも、保育者の当事者性に基づく実感や体験世界が描きやすいと推測される。

第三に、自己エスノグラフィーを用いた保育研究が、当事者性に基づく研究成果に結びついていることである。たとえば、岡田ら(2008)は、自己エスノグラフィーにより保育者の幼児理解の道筋や構造を明らかにしている。また佐藤(2011)は自己エスノグラフィーにより、保育者の「語られなかった」保育を枠組みとした実践における「保育性」を明らかにしている。このように、自己エスノグラフィーを用いた保育研究は保育者の当事者性に基づく実感や体験世界を明らかにしている。

しかし、これまで自己エスノグラフィーを用いた保育研究では、分析枠組みとして自己エスノグラフィーの理論を部分的に紹介することはあっても(岡田ら 2008, 野田 2010, 佐藤 2011, 山本ら 2012, 岡田 2014, 杉本ら 2017), 保育研究において自己エスノグラフィーを用いることの意義、可能性、課題などの研究方法論的側面を主な議論として扱ってはこなかった。だが、上述したように、自己エスノグラフィーが保育者の当事者性に基づく実感や体験世界を描ける可能性があること、自己エスノグラフィーを用いた保育研究が一定の成果を出していることを加味すると、保育研究における自己エスノグラフィーを用いることに関する議論が必要だと思われる。

#### 4. 本研究の目的

以上より本研究では、保育研究における自己エスノグラフィーを用いることの可能性と課題を検討することを目的とする。具体的には第Ⅱ章で自己エスノグラフィーの意義や利点、課題に関する議論を整理する。第Ⅲ章では先行研究を整理して自己エスノグラフィーを用いた保育研究の可能性と課題を探る。最後に第Ⅳ章では、自己エスノグラフィーを用いた保育研究がより発展できるように、第Ⅱ章と第Ⅲ章から明らかになった課題を解決できるような工夫を提案し、理論的考察を行う。

## Ⅱ. 自己エスノグラフィーに関する議論

本章では先行研究のレビューを行い、自己エスノグラフィーの概要、利点、課題を整理する。

### 1. 自己エスノグラフィーとは何か

先述したように自己エスノグラフィーとは、調査者自身を研究対象とし、自身の主観的な経験について、「私」がどのように、なぜ、何を感じたかという自己再帰的に考察することを通して、文化的・社会的文脈の理解を深める(井本 2013)質的研究方法論を指す一方で、その研究成果を指すこともある(Ellis, Adams, & Bochner, 2011)。

自己エスノグラフィーは Hayano (1979) によって創始され、そもその起源は外来の調査者による一方的な調査や記述に現地人や当事者が反抗・抵抗する様式として登場した(牛田 2004)と言われている。

自己エスノグラフィーは厳密な定義や用法の規定があいまいなまま発展してきた(Ellis & Bochner, 2000/2006)が、その大まかな特徴としては自叙伝的な記述とエスノグラフィー研究<sup>3)</sup>の特徴を組み合わせたものであり、自己エスノグラフィーを行う筆者が過去にさかのぼりながら選択的に過去の経験を書くという方法で行われる(Ellis, Adams, & Bochner, 2011)。自己エスノグラフィーには詩、随筆、日誌などの様々な形式があるが、通常は一人称で書かれ、具体的な行為、対話、感情、思想、精神性、自己意識などが表現される(Ellis & Bochner, 2000/2006)。この時、筆者は経験を分析するために方法論的ツールや研究文献を使用するだけでなく、読者が筆者と同じような「本質的な気づき」を経験するような方法を考慮する必要がある(Ellis, Adams, & Bochner, 2011)。言い換えれば、読者に文化体験の側面を説明するためには、自己エスノグラフィーを行う筆者の個人的な経験を使用しなければならず、そうすることで、その文化の中にいる者と文化の外にいる者が、その文化を身近に感じられるように記述する必要がある。また、これを達成するには、既存の研究(e.g., Ronai, 1995)と個人的な経験を比較、対比したり、文化の中にいる者にインタビューするか(e.g., Tillmann-Healy, 2003)、もしくは関連する文化的成果物(Boylorn, 2008)を調べるなどの工夫が求められることもある(Ellis, Adams, & Bochner, 2011)。ただし、自己エスノグラフィーの形態は他者の研究、筆者自身もしくは他者との相互作用、伝統的な分析、インタビューの文脈、権力関係などにどのくらいの重点を置くかによって異なる(Ellis,

Adams, & Bochner, 2011) ことに注意する必要がある。

以上より、自己エスノグラフィーは筆者の関心の重点をどこに置くかによってその方法は様々であるものの、筆者の主観的な経験を自己再帰的に考察することを通して、文化的・社会的文脈の理解を深める質的研究方法論であり、読者が筆者のいる/いた文化を理解・体験できるような記述が求められる点は共通している。

## 2. 自己エスノグラフィーの利点

自己エスノグラフィーの利点は次の二つである。第一に、当事者の視点から現象を描ける点である。従来のエスノグラフィーが研究者の視点に基づく出来事の表象であるのに対し、自己エスノグラフィーは当事者の視点に基づく出来事の表象であることから、研究者の視点では描き出すことができない側面に光を当てることが期待される(岡田ら 2008)。そのため、自己エスノグラフィーによる知見は、従来のエスノグラフィーの知見と合わせることで、複合的な視点から現象を理解することを助ける(小川 2017)だけでなく、同様の事象に対峙している他者に有益な知見を提供することにつながる(伊藤 2015)とも言われている。

第二に、主観的で感情的な経験を記述することを通して、筆者自身の経験に対する意味づけを表せる点である。社会科学において主観的で感情的な経験の記述は正当な研究として評価されない場合がある(井本 2013)。だが、自己エスノグラフィーは、人間の様々な感情や経験を、統計や客観的な事実を述べたデータで説明できるものと捉えず、むしろ人間社会の理解に不可欠なものであり社会科学において取り上げるべき課題と捉えている(井本 2013)。したがって、自己エスノグラフィーでは経験した「事実」を正確に描くことよりも、経験についての「意味づけ」を表現することが重視されるため、筆者の主観的で感情的な経験が記述されるのである(井本 2013)。言い換えれば、筆者の主観的で感情的な経験を記述することを通して、筆者自身の経験に対する「意味づけ」を表すことができるのである。

## 3. 自己エスノグラフィーの課題

一方で、自己エスノグラフィーは自叙伝とエスノグラフィー研究の特徴を持つために、様々な立場からその課題が指摘されている(Ellis, Adams, & Bochner, 2011)。

第一に、自叙伝という立場からみた自己エスノグラフィーの課題である。これは自己エスノグラフィー

の科学性を追求するあまり、文学的、芸術的でないという批判(Ellis, Adams, & Bochner, 2011)によるものであり、言い換えれば、自己エスノグラフィーを一種の物語であると捉えた時、文学が持つ特徴とされる親しみやすさ、読みやすさ、わかりやすさに欠け、読みにくく味気ない記述が多いという課題(沖潮 2013)を意味する。これは読者が筆者のいる/いた文化を理解・体験できるという先述の自己エスノグラフィーの特徴から外れるものになる。

第二に、エスノグラフィー研究という立場からみた自己エスノグラフィーの課題である。たとえば、社会科学の基準から自己エスノグラフィーを見た時に、研究の正確さや理論的側面、分析的側面が弱く、芸術的美の側面や感情的、治療の側面が強調されすぎている(e.g., Ellis, 2009)という批判がある。また、個人の経験を用いることは、記憶に頼りすぎた信頼性の乏しいバイアスのかかったデータを使用することになるため、研究として信頼性に欠ける(e.g., Anderson, 2006)という批判もある。他にも、自己エスノグラフィーは仮説を立て、分析し、理論化する学問的義務を果たさないため、自己陶酔的で過度な主観性と自己欺瞞以上の何ものももたらすことができない(Bastick, 2004)危険性があるとされている。つまり、自己エスノグラフィーで筆者の体験が鮮明に描かれるものの、そこに重点を置きすぎたために、バイアスのかかったデータの使用、分析的側面の弱さという課題が生じる。なお、このような課題が生じる原因については、それらを解決する工夫を論じる第IV章で後述する。

以上を整理すると自己エスノグラフィーの課題として、読みにくく味気ない記述、バイアスのかかったデータの使用、分析的側面の弱さが挙げられる。

## Ⅲ. 自己エスノグラフィーを用いた保育研究の可能性と課題

前章では自己エスノグラフィーの利点と課題について整理したが、本章ではこれまでに刊行された自己エスノグラフィーを用いた保育研究に焦点を当て、その可能性と課題について考察する。

### 1. 自己エスノグラフィーを用いた保育研究の可能性

先行研究(岡田ら 2008, 野田 2010, 佐藤 2011, 山本ら 2012, 岡田 2014, 杉本ら 2017)を整理したところ、自己エスノグラフィーを用いた保育研究には次の3つの可能性があると考えられる。

第一に、自己エスノグラフィーにより保育者の中で言語化されていない専門性を理論化できる可能性であ

る。たとえば岡田ら（2008）は、自身の経験を再帰的に振り返るという自己エスノグラフィーの理論に依拠しながら、保育記録を分析しており、保育者である岡田が幼児理解するプロセスと、そこに同僚保育者の及ぼす影響について明らかにしている。また同様のアプローチで、岡田（2014）は幼児理解の道筋についても明らかにしている。野田（2010）は自身の実践事例を再帰的に振り返りながら、幼児の心が動いている保育と動かされている保育とを比較、考察して、幼児の運動への意欲を育てる保育援助のあり方を探っている。

これらの研究から、自身の保育経験について、どのように、なぜ、何を感じたかを自己再帰的に考察する自己エスノグラフィーを行うことで、保育者の中にあるはっきりと言語化されていない専門性が理論化される可能性が示唆される。

第二に、自己エスノグラフィーによって回顧的に自身の保育を振り返ることで、その時の経験を意味づけできる可能性がある。すなわち、岡田ら（2008）のように「どのように～しているのか」という問いで、保育経験を断片化して、それらを構造化しながら専門性を理論化するのではなく、佐藤（2011）のように「どのように～していたのか」という問いで、回顧的に保育経験の様相（プロセス）を振り返りながら経験を意味づけしていくことで、保育者がおかれていた当時の考え方や捉え方を明らかにできる可能性を意味する。たとえば、佐藤（2011）は6年前の1名の男児との個別活動という保育経験を振り返り、そのときに、専門性の迷い、無意識化での気づき、自己の保育への気づきという経験があったことを「保育性」という言葉で表現している。また、山本ら（2012）は佐藤（2011）によって示された「短い期間での振り返りでは明らかになりにくい、自己の保育に存在する保育者特有のもの」の捉え方や考え方の様相を描き出すことを可能にする」という自己エスノグラフィーの理論に依拠して、自身もインタビューとしてグループ・インタビューに参加しながら過去の自身の保育経験を振り返り、語りなおすことで登園場面の配慮を意味づけている。

第三に、当事者の視点から保育研究を行うために、研究者自身の保育経験を理論的な意義があるデータとして扱える可能性である。たとえば、岡田は出来事の当事者（保育者）であるため、自らの保育記録の分析結果を妥当性や信頼性を要求する研究の土壌に位置付けることが困難であると自覚しつつも、当事者であることに意味を見出し、そのデータが第三者の視点では描き出すことのできない様々な側面に光を当てる可能性があることを指摘した（岡田ら 2008）。すなわち、自己エスノグラフィーの理論に依拠することで、研究

者自身の保育経験は、当事者でしか分かり得ない現象にアプローチするためのデータになる。したがって、研究者自身の保育経験を扱うことに説得的な意義が見出される。

こうした保育研究における自己エスノグラフィーの意義は支持されており、杉本ら（2017）の研究のように、日常的な保育実践における自らの援助を振り返る過程で得られる保育者自身の語りを言語化することを試み、当事者性を損なわないようなサンプリングの方法として取り入れられる場合もある。

## 2. 自己エスノグラフィーを用いた保育研究の課題

一方で自己エスノグラフィーを用いた保育研究は、花家（2012）が指摘するように、記述の方法に課題があるとされている。花家は、岡田ら（2008）や野田（2010）の研究が「保育者は出来事の当事者である」という点で（中略）妥当性や信頼性を要求する研究の土壌に自らの保育記録の分析結果を位置づけることは困難」であることを解決するために自己エスノグラフィーの理論のみを受容しており、他の文献に見られるような自叙伝的な記述がなされていないことを指摘する。岡田ら（2008）の研究は、筆者がなぜ、どのように、何を感じたかを自己再帰的に考察して経験を分析しており、幼児理解の理論を導き出した点で十分に評価されるものであるが、M-GTA（木下2007）などの質的研究方法論を採用したことで、事例における人々の行動やその意味などの具体性や時系列などを捨象することになってしまい（境ら2012）、筆者自身の保育経験をストーリーとして読み取ることが難しくなったと考えられる。

このように自己エスノグラフィーにおける分析的側面の弱さを解決しようとする中で、読みにくく味気ない記述（沖潮 2013）になり、研究者の保育経験をストーリーとして読み取れないという課題が生じると考えられる。

## IV. 課題を解決する工夫の提案

本研究では自己エスノグラフィーの利点と課題と自己エスノグラフィーを用いた保育研究の可能性と課題について整理してきた（次頁の表1参照）。自己エスノグラフィーの課題については自叙伝かエスノグラフィー研究かという立場の違いから指摘されるものであり、「解決すべき問題ではな」く「生きる道の違い」（Rorty, 1982）という意見もあるが、本研究では自己エスノグラフィーを用いた保育研究がより発展できるように、どのような工夫をすることで上記の課題が解

決できるかを考えてみたい<sup>4)</sup>。

1. データとしての日記の活用

自己エスノグラフィー研究では、筆者の記憶がデータとして用いられることがある (Ellis, & Bochner, 2000/2006)。しかし、記憶は選択的であり経験によって意味が変化することもあり (沖潮 2013)、不正確なものである (アラシエフスカ 2011, p.228)。そのため、記憶をデータとして用いることはバイアスのかかったデータを用いることになる (e.g., Anderson, 2006)。

一方で、日記は日々の筆者の経験が記されているため、作者がどのように状況を解釈していたか、どのように行為や出来事に意味を見出しているかを解明することを可能にする (アラシエフスカ 2011, p.77)。

すなわち、日記を使えば、事象が起きたその時点での記録を可能にして回顧によるバイアスを最小化することができる (アラシエフスカ 2011, p.228) ため、バイアスのかかったデータの使用という問題を解決できると言えよう。

ところで、こうした理由は自己エスノグラフィーを用いた研究全般に当てはまるものであるが、日記の活用は別の理由でも自己エスノグラフィーを用いた保育研究に適している。これまでの自己エスノグラフィーを用いた保育研究では、保育経験を有する研究者の記憶のみに頼らず、保育日誌をデータとして使用してきた (e.g., 岡田ら 2008 岡田 2014)。岡田ら (2008) のように、保育者の幼児理解の構造を明らかにするという目的であれば、幼児がどのような動機で遊びに取り組んでいるかなどが記述されている保育日誌を用いることは適当である。しかし、保育者の当事者性に基づく実感や体験世界を描くのであれば、日記を用いることがより適していると思われる。保育日誌は公簿としての記録であるため、保育者の私的な感想や思いを書き込むことを避け、公簿にふさわしい必要最低限の内容を書くことが求められるのに対して、日記は保育実

践を展開していく過程で、保育者が感動したこと、発見したこと、驚いたこと、不思議に思ったことを素直な言葉で綴ることができる (加藤 2014) からである。

2. 分析における概念ツールとしての TEM の活用

自己エスノグラフィーの、分析的側面の弱さ、研究者の保育経験をストーリーとして読み取れないという課題を解決する工夫として、対象者の具体的な経験のプロセスを、時間を捨象せずに描き出すとともに、対象者の経験を社会との関係性の中で理解する複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling ; 以下 TEM, サトウ編 2009, 安田ら編 2012, 2015) の活用を提案する<sup>5)</sup>。

まず、分析的側面の弱さという課題を解決できる理由を説明する。分析的側面の弱さの1つとして、筆者自身の経験を記述・分析するにあたり自己を客観視することの難しさがある。つまり、自分自身を観察の主体であると同時に客体として見ながら、自身の経験を対象化し、それを分析的に記述する難しさである (沖潮 2013)。その難しさを TEM は解決できると思われる。その理由は TEM の概念ツールにある。自己エスノグラフィーにおいて、筆者の経験を綴るだけでは価値観や感情が前面に出過ぎた自己主張になる恐れがある (岡田ら 2008) と言われているが、TEM では分析を通して TEM 図 (分析結果を図式化したもの) を作成することで、自身の経験を可視的に理解すること (安田ら編 2012, p.96)、また、他者や社会からどのような影響を受けて変容したのかを理解することを可能にする (安田ら編 2012, p.45-46)。他にも TEM には、等至点 (Equifinality Point : EFP) や両極化した等至点 (Polarized EFP : P-EFP) などの概念ツールが存在する (安田ら編 2015)。EFP は研究上焦点化される経験を、P-EFP は研究者が設定した等至点の補集合的な経験である両極化した等至点を意味する (たとえば、「結婚する」を EFP に設定した場合、「結婚し

表1 自己エスノグラフィーおよび自己エスノグラフィーを用いた保育研究に関するまとめ

	自己エスノグラフィー	自己エスノグラフィーを用いた保育研究
利点/可能性	<ul style="list-style-type: none"> <li>当事者の視点から現象を描ける</li> <li>主観的で感情的な経験を記述することを通して、筆者自身の経験に対する意味づけを表せる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>保育者の中で言語化されていない専門性を理論化できる可能性</li> <li>回顧的に自分の保育を振り返ることで、その時の経験を意味づけできる可能性</li> <li>(当事者の視点から保育研究を行うため) 研究者自身の保育経験を理論的な意義があるデータとして扱える可能性</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>[自叙伝という立場からみた課題]</li> <li>(科学性を追求するあまり) 読みにくく味気ない記述</li> <li>[エスノグラフィー研究という立場からみた課題]</li> <li>バイアスのかかったデータの使用</li> <li>分析的側面の弱さ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(分析的側面の弱さを克服しようとするために、味気ない記述となり) 研究者の保育経験をストーリーとして読み取れない</li> </ul>

ないこと」がP-EFPとなる)。このEFPとP-EFPという概念ツールを用いることで「研究者の独りよがり」を中和できるという(安田ら編 2012, p.225-228)。すなわち、EFPの現象を「良いもの」として捉えがちになるため、P-EFPを設定することで分析者の価値観を相対化しようとするのである。以上の理由から、TEMを用いることにより、自己エスノグラフィーにおいて過度な主観により自身の経験を分析することが避けられると言えよう。

また、もう1つの分析的側面の弱さとして、自己エスノグラフィーでは自己に焦点が絞られすぎているため、自分をつくる他者の存在がないがしろにされる(Chang, 2008) 難しさがある。TEMは対象者の経験を社会との関係性のなかで理解する(安田ら編 2012, p.235-236) という方法論的特徴を持つ。すなわち、TEMの概念ツールである、「社会的方向づけ」(Social Direction : SD) や「社会的助勢」(Social Guidance : SG) を用いることで、社会や他者との関係から個人の経験を読み取ることができるのである(安田ら編 2012, p.34-37)。たとえば、弦間亮は学生の学生相談室に相談したかったが相談できなかった経験を分析しており、「他者の勧め」がSGとして働くことで、学生が「学生相談室を利用すること」に近づくという(安田ら編 2012, p.125-137)。以上より、自己エスノグラフィーでTEMのSGやSDを用いることは、社会や他者が自身の経験にどのような促進的な影響を及ぼしているか、また阻害的な影響を及ぼしているかを加味した分析が可能になる。

次に、研究者の保育経験をストーリーとして読み取れない課題を解決できる理由について説明する。自己エスノグラフィーは筆者の経験やその時の感情などを振り返り、想起しながらストーリーとして記述していく(沖潮 2013) 方法を取り、それによって時間の流れの中で筆者がどのように変化したかを示すことで、筆者の経験を意味づけられる(Ellis, & Bochner, 2000/2006)。しかし先述したように、自己エスノグラフィーとM-GTAのような他の質的研究方法論を併用したことで、事例における人々の行動やその意味などの具体性や時系列を捨象することになれば、結果として保育経験のストーリーを描くことはできず、筆者にとってその経験がどのような意味を持っていたかを明らかにすることは難しいだろう。その点、TEMは個人に経験された時間の流れを重視する質的研究方法論であるため(安田ら編 2012, p.2)、自己エスノグラフィーと相性が良いと思われる。たとえば、小川晶はTEMの分析をして、保育士であった自身の1年間の母親支援における感情を振り返った(安田ら編 2012,

p.88-99)。そしてTEM図(分析結果を図式化したもの)を作成することで、自信の感情の変容プロセスに気付けたという(安田ら編 2012, p.96-97)。このように、時間の流れを捨象せずに個人の変容を描くTEMの過程は、自己エスノグラフィーにとっても重要な過程である。そして、その過程によって筆者の経験を意味づけられることになり、結果として保育経験のストーリーが描かれるのである。ただし、TEMでも個人の経験の抽象度をあげてラベル化する作業が伴う(安田ら編 2012, p.90) ため、論文で保育経験をストーリーとして描く際には経験の内容を補足するような記述が必要となる。

## V. おわりに

本研究では、保育者の当事者性に基づく実感や体験世界を描くのに適した質的研究方法論の一つとして自己エスノグラフィーに着目した。そして保育研究における自己エスノグラフィーを用いることの可能性と課題を探るために、自己エスノグラフィーの意義や利点、課題に関する議論を整理し、また自己エスノグラフィーを用いた保育研究の可能性と課題を検討した。さらに、自己エスノグラフィーを用いた保育研究がより発展できるような工夫を提案し理論的考察を行った。

自己エスノグラフィーを用いた保育研究は、第三者の視点で描き出すことができない側面に光を当てることが期待される(岡田ら 2008) だけでなく、保育者の当事者性に基づく実感や体験世界を描くことも期待される。また自己エスノグラフィーのような、調査者自身を研究対象とし、自身の主観的な経験について、「私」がどのように、なぜ、何を感じたかという自己再帰的に考察する(井本 2013) 一人称的研究(自分自身の体験を吟味検討し経験化していく)は、実感的基盤のある了解や人間理解のために着目すべき問題、現象の判断を含むため、保育を向上する糸口になることも示唆されている(関口 2006)。このように自己エスノグラフィーを用いた保育研究は、保育研究全般に様々な側面で寄与する可能性があるだろう。

しかし、それと同時に、自己エスノグラフィーを用いた保育研究は次のような危険性も併せ持つだろう。

1つは、自身の保育経験を過信して絶対視することの危険性である。たしかに自身の保育経験には当事者性に基づく実感や体験世界が含まれているため、それを分析することで、非当事者である研究者の視点では描き出すことができない側面に光を当てられるかもしれない。とはいえ、その経験によって保育現象の全て

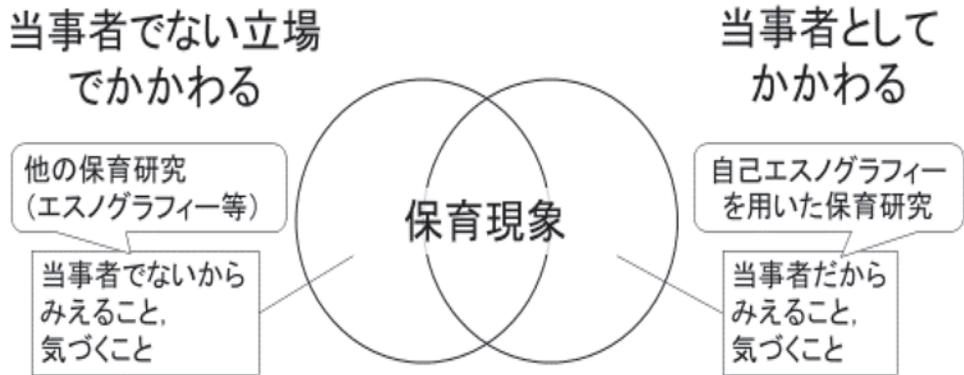


図1 対象者との関係性による保育現象に対する理解の視点の重なりと相違 (菅野2007を参考に作成)

を明らかにできるものではない。菅野（2007）が指摘するように、当事者だからすべてを見られるわけではなく、当事者でないからこそ見えたり見えなかったりする部分があるのも事実である。あくまでも関係性の違いによって表れる視点の重なりと相違は、判断・解釈の可能性をひろげることになる（菅野 2007）。すなわち、自己エスノグラフィーによる知見は、従来のエスノグラフィーによる知見と合わせることで、複合的な視点から、ある現象の理解を助けるもの（小川2017）である（以上の説明は図1のように示される）。したがって、自己エスノグラフィーを用いた保育研究を行う際は、そのことに留意する必要があるだろう。

もう1つは、研究者が自身の保育経験を対象に分析できるという自己エスノグラフィーの側面だけを見て、手軽に研究できる質的研究方法論として自己エスノグラフィーが用いられることの危険性がある。いくら、自己エスノグラフィーが当事者の視点に基づく出来事の表象を描き、研究者の視点では描き出すことができない側面に光を当てることが期待される（岡田ら2008）ものであっても、丁寧な先行研究の検討や分析上の工夫なしに自身の経験を分析するだけでは、自己陶酔的で過度な主観性と自己欺瞞（Bastick,2004）の強い保育研究としか見なされず、保育研究にも保育の質の向上にも寄与しないだろう。

最後に本研究の課題を述べる。本研究では保育研究における自己エスノグラフィーの課題を解決する工夫を提案したが、この提案は理論的考察を通して導き出されたものである。したがって、今後さらに自己エスノグラフィーを用いた保育研究を発展させるには、上記の工夫を施した自己エスノグラフィーの作業内容や成果などの側面から検討する必要がある。

### 【注】

- 1) 榎沢は（保育の）実践研究について論じているが、その論考において保育実践は保育研究の重要なテーマであり、すべての研究がそこに収斂する核であると述べている（榎沢 2018）。したがって、本研究では実践研究も保育研究として扱う。また同様の理由で関口（2006）の論考も保育研究として扱う。
- 2) 2018年9月27日に国立情報学研究所が運営する学術情報データベースであるCiniiで「保育」「M-GTA」というキーワードで検索した結果、34件の論文がhitした。同様の条件で他の質的研究方法論も検索し論文数を比較したところ（たとえば、TEM（安田2012）は27件、SCAT（大谷2011）は21件）、質的研究方法論を用いた保育研究においてM-GTAが比較的多く用いられていた。
- 3) エスノグラフィーとは、人びとが実際に生活したり、仕事をしたりしている現場を、調査者が内側から理解するための調査・研究の方法である（小田2010）。詳細は小田（2010）を参照。
- 4) 自己エスノグラフィーにおける、研究の正確さや理論的側面、分析的側面の弱さなどの課題を解決しようとした研究も存在する。たとえば、Anderson（2006）は「分析的自己エスノグラフィー」（Analytic Autoethnography）を提案しており、①全メンバー調査員（CMR）の立場を示すこと、②分析的再帰性、③研究者自身の物語の可視性、④情報提供者との対話、⑤理論的分析への傾倒という特徴を持つことで解決できることを示唆する。また沖潮（2013）は、他者との対話を通して自己を再帰的に振り返る「対話的自己エスノグラフィ」提案しており、対話者からの疑問や問題提起、感想などによって自然に自己

を客観視し、新たな自分への気づきが生まれやすくなり、より自己探求を深めることが期待できるといふ。対話的自己エスノグラフィは対話により、語りのなかの矛盾が修正されるため語りの一貫性が担保されたり、自己を相対化した視点で分析できるので分析的側面の課題を解決できるだけでなく、対話を通して読み手に伝わりやすくなることで、読みにくい味気ない記述の課題も解決できることが示唆されている(沖潮 2013)。

5) TEM の詳しい分析手続きについてはサトウ編(2009)、安田ら編(2012)、安田ら編(2015)を参照。

## 【引用文献】

- Alaszewski, A. (2006). *Using Diaries for Social Research*. Thousand Oaks, Sage Publications (A. アラシェフスカ(2011) 日記とはなにか—質的研究への応用. 川浦康至・田中敦訳. 誠信書房. 77-85, 226-233)
- Anderson, L. (2006). Analytic Autoethnography. *Journal of Contemporary Ethnography*, Vol 35, No 4. August 2006. 373-395
- Bastick, B. B. (2004). Auto-Interviewing, Auto Ethnography and Critical Incident Methodology for Eliciting a Self-Conceptualised Worldview. *Forum Qualitative Social Research* Vol5, No1. (<http://www.qualitative-research.net/index.php/fqs/article/viewFile/651/1411>, 2018年9月24日取得)
- Boylorn, R. M. (2008). As seen on TV: An autoethnographic reflection on race and reality television. *Critical studies in Media Communication*, Vol 25, No 4, 413-433
- Chang, H. (2008). *Autoethnography as method*. CA:Left Coast Press
- Ellis, C. (2009). Telling tales on neighbors: Ethics in two voices. *International Review of Qualitative Research*, Vol 2, No 1, 3-28
- Ellis, C. Adams, T. E. & Bochner, A. P. (2011). AutoEthnography: An Overview. *Forum Qualitative Socializing / Forum: Qualitative Social Research*, Vol 12, No 1, 273-290
- Ellis, C. & Bochner, A. P. (2000). Autoethnography, Personal Narrative, Reflexivity: Research as Subject. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln. (Eds.), *Handbook of qualitative research, second edition*. Sage Publications, 733-768 (第5章 自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性: 研究対象としての研究者. エリス & ボクナー 平山満義(監訳) 大谷尚・伊藤勇(訳) (2006) N. K. Denzin Y. S. Lincoln編. 質的研究ハンドブック3巻 質的研究資料の収集と解釈. 北大路書房. 129-164.)
- 榎沢良彦(2018) 実践研究と主観性. 保育学研究 56(2). 124-131
- 花家彩子(2012) 演劇経験を教育的に評価するための研究方法としてのオートエスノグラフィーの可能性. 学校教育学研究論集(25). 85-98
- Hayano, D. M. (1979). Auto-ethnography: Paradigms, problems, and prospects. *Human Organization*, Vol 38, 113-120
- 井本由紀(2013) オートエスノグラフィー. 藤田結子・北村文編. ワードマップ 現代エスノグラフィ 新しいフィールドワークの理論と実践. 新曜社. 104-111
- 伊藤精男(2015) 人材育成研究における「自己エスノグラフィー」の可能性. 九州産業大学経営学会経営学論集 25(4). 25-43
- 加藤繁美(2014) 2 実践記録って、いったい何ですか? . 実践アップシリーズ3 記録を書く人書けない人 楽しく書けて保育が変わるシナリオ型記録. ひとなる書房. 10-13
- 菅野幸恵(2007) 第1章 固定化された関係を越えて. 宮内洋・今尾真弓編. あなたは当事者ではない—〈当事者〉をめぐる質的心理学研究—. 北大路書房. 18-27
- 木下康仁(2007) ライブ講義 M-GTA —実践的質手研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂
- 中坪史典・柴山真琴・田中浩司・二宮祐子(2017) 保育学の研究方法論を考える(1) 保育実践と質的研究: その「質」を問う. 保育学研究 55(3). 105-120
- 野田美樹(2010) 運動する意欲を育てる保育の探求—幼児の心が動く場面を手がかりに—. 愛知教育大学幼児教育研究 15. 57-64
- 小田博志(2010) エスノグラフィー入門〈現場〉を質的研究する. 春秋社
- 小川さやか(2017) オートエスノグラフィに溢れる根拠なき世界の可能性. 現代思想11月号 45(20). 青土社. 123-137
- 岡田たつみ・中坪史典(2008) 幼児理解のプロセス—同僚保育者がもたらす情報に注目して—. 保育学研究 46(2). 169-178
- 岡田たつみ(2014) 幼児理解への道筋—自らの保育記録をデータとして—. 帝京大学教育学部紀要 2. 245-251

- 沖潮(原田)満里子(2013)対話的な自己エスノグラフィ  
-語り合いを通じた新たな質的研究の試み。質的心理学研究 12. 157-175
- 大谷 尚 (2011) SCAT : Steps for coding and Theorization - 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法 -。感性工学 10(3). 155-160
- Ronai, C. R. (1995). Multiple reflections of child sex abuse. *Journal of Contemporary Ethnography, Vol 23, No 4, 395-426*
- Rorty, R. (1982). Consequences of pragmatism (essays 1972-1980). *Minneapolis: University of Minnesota Press, 197*
- 境愛一郎・中西さやか・中坪史典 (2012) 子どもの経験を質的に描き出す試み - M-GTA と TEM の比較 -。広島大学大学院教育学研究科紀要。第三部。教育人間科学関連領域 61. 197-206
- 佐藤智恵 (2011) 自己エスノグラフィによる「保育性」の分析 - 「語られなかった」保育を枠組みとして -。保育学研究 49(1). 40-50
- 佐藤郁哉 (2008) 質的データ分析法 原理・方法・実践。新曜社
- サトウタツヤ編 (2009) TEM ではじめる質的研究 - 時間とプロセスを扱う研究をめざして -。誠心書房。iii-viii
- 関口はつ江 (2006) 保育実践研究の動向と課題。保育学研究 44(1). 76-86
- 杉本翔平・石田淳也・松延毅・中村知嗣・藤田清澄・本田由衣・香曾我部琢 (2017) “気になる子” への援助とクラス全体への援助 - 保育者による援助の配分 -。宮城教育大学情報処理センター研究紀要 24. 45-52
- Tillmann-Healy, L. M. (2003). Friendship as method. *Qualitative Inquiry, Vol 9, No 5, 723-749*
- 戸田雅美・西本望・門田理世・虫明淑子・亀山秀郎・河邊貴子(2017)〈編集常任委員会企画シンポジウム〉保育実践の「知」の交流と批判的検討の可能性Ⅱ - 実践の当事者性を持った「問い」からどのように研究論文を作成するか -。保育学研究 55(3). 93-94
- 牛田匡 (2004) 自由教育学校に関する一考察 - オートエスノグラフィ研究に注目して -。関西学院大学教育学科研究年報 30. 61-68
- 津守真・本田和子・松井とし・浜口順子 (1976) 人間現象としての保育研究 - 1 : 人間現象としての保育研究。光生館。11
- 山本聡子・松葉百香 (2012) 子どもの登園における保育者の配慮に関する研究。名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究 18. 97-108
- 安田裕子・サトウタツヤ編 (2012) TEM でわかる人生の経路 - 質的研究の新展開。誠心書房。2. 39-47, 88-99, 125-137, 225-228, 235-236
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編 (2015) ワードマップ TEA 理論編 複線経路等至性アプローチの基礎を学ぶ。新曜社

## 【謝辞】

論文の執筆にあたり貴重なコメントをして頂いた、淀澤真帆さん（広島大学大学院博士課程後期）に深く感謝申し上げます。

（主任指導教員 中坪史典）